

1. はじめに
2. 生態系問題に関する論議
3. 深層生態学の台頭
 - 1) 深層生態学の概念
 - 2) 深層生態論者たちの環境政策
 - 3) 深層生態学の発展と運動
4. 統一思想と深層生態学
 - 1) 自然と人間と万物との関係
 - 2) 人間を中心した万物が存在する目的
 - 3) 個性真理体としての人間と連体としての万物
 - 4) 神様の心情理解
 - 5) 真の万物の日の制定
5. 結びに

1. 序論

人類の歴史はある意味で自然破壊と汚染の歴史であるといえる。このような自然破壊ないし汚染が大問題にならなかったことは、自然の自浄作用によって汚染は自然に還元され、均衡を維持しながら自然が破壊されなかったからである。しかし今や、環境問題は私の家庭だけをきれいにしてもだめで、また自分たちの周辺だけをきれいにしてもだめで、更には我が国と世界全体だけをきれいにしてもだめなところまで発展している(1)。

このような時点で私たちは環境問題に対する理解と関心、知識と技術を土台にして具体的な実践をしなければならないのである。

ブレン・スイム(Brain Swimme)とトーマス・ベリー(Thomas Berry)は次のような宣言を行ったが、私たちがその話に耳を傾けるのは賢明なことになるだろう。

「地球生態系の健康は、人間たちの健康の一つの前提条件である。私たちは甚だしくは、一番進歩した医学の力をもってしても、病にかかった地球上では健康を所有することができない。地が消化して変化させうる以上の多量の様々な毒素を継続して排出してしまったなら、地球共同体の家族たちは病んでしまうだろう。人間の健康は派生的なことに過ぎない。地球の健康が根源的である」と宣言している(2)。

今日、地球汚染とともに環境問題を惹起させた原因子がまさに人間たち自身であると前提して、このような人間たちを動かす原因子はまさに各自の意識構造である。言い替えれば、自然をどのように見て解釈するのかの価値観の問題であると規定する時、このような意識構造(価値観)さえ変えれば環境問題をある程度解決することができるを見る。

研究者は生態系問題を克服する方法の一つとして、人間の意識構造を変化させる方法が最善の方法であるという前提から見た研究を始めた。本論文では統一思想を根幹として環境問題解決の糸口を探求しようとする。まず、その間の生態系問題に関する論議を研究して見て、環境問題解決のアプローチの方法として深層生態学的方法を考察しようとする。それは環境問題の根源は結局人間の価値観または大自然観の認識変化にあると見るためである。

したがって深層生態学の基底として統一思想の原相論、存在論、本性論等において深層生態学的観点を考察して見て、天一国時代の環境論の試論として問題を提起しようとする。

2. 生態系問題に関する論議

人類文明史は自然と人間との関係をどのように規定するのかにしがって大きく二つに分けられつつ、互いに異なる価値観と歴史を成して来た。

西洋の自然観は近世以後くっきり現われたが、それらは自然を人間の生のための手段と道具として見た。したがって自然をどのように管理し利用するかということが学問の中心事項であった。特に、西洋の自然観は古代イスラエルのユダヤ教的信仰思想であるヘブライズム (Hebraism) とギリシャ、ローマを中心として地中海沿岸のヨーロッパ文化と中東のイスラム文化圏の交流から成り立ったヘレニズム (Hellenism) 文化の二つの主流から発展して来た。そしてヘブライズムはキリスト教の根として、ヘレニズムは自然科学と合理主義、経験論、機械論の価値観と社会観によって形成されながら今日の西欧開拓史的な大自然観として現われているのである。宗教的信仰中心のヘブライズムは自然と人間との関係を対立的に把握しながら、人間を自然との共生関係よりは支配と開拓の立場をとっていて、それは次のようなことに発見される (3)。

旧約聖書の中で人間が神様から受けたといういわゆる三大祝福、創世記 1 章 26 節から 31 節までを分析して見なければならない。「治めよ」、「征服せよ」という意味を人間たちは人間中心的に解釈しながら自然破壊の根拠になる資料として使って来たからである。しかし古代ヘブル人は随分前から人間を神様の被造物である自然の一部として見、このような観点は人間を創造の中心として見たのである (4)。

創世記 1 章 26 節の「治める」はヘブライ語の rahdah であるが、旧約では否定的な意味をもっている (5)。しかし「治める」の本来の意味は抑圧と破壊ではなく、治めることを受ける者のために面倒を見るという意味である。本来この言葉は古代エジプトとハビロンの宮廷言語として、皇帝が地と主人たちの幸福のために彼らを見るという意味で使われたのである。

「征服する」という意味のヘブライ語の kahvash にも否定的な意味があることは事実である。地を征服しなさいという命令を通じて人間の活動に対して高い価値が付与され、数々の自然に対する伝統キリスト教的な驕慢と、キリスト教の無慈悲な結果を誘発したという批判を避けることができない (6)。

しかし地を征服せよという神様の命令は、人間に対する神様の祝福形式という点に留意しなければならない。むしろここで言う征服は人間が自然をつくって自然とともに健康で倅せに暮すようになることを意味する。それはすべての被造物たちの平和な共生を意味する。これは搾取と破壊、自然に対する人間の支配権の独占を意味するのではない。そのようになれば自然だけでなく、人間もやはり地上に生き残ることができないからである。すなわち人間

が地であり、地がすなわち人間であり自然であり、自然がすなわち人間である。だから人間は自然を見る時、人間を見るように見なければならないという話になる（7）。

しかしここにおいて西洋の自然観は、自然の万物に対する支配意識と征服意識の価値観をもつようになり、いわゆる人間中心主義(Anthropocentrism)が形成され、それは人間以外のすべての生命を一つの利用価値だけで評価する自然観として発展した。

東洋の自然観は、西洋人たちが自然を手段と主管の対象として見たことに対して、東洋人たちは自然を順応の対象として見た。自然は支配する対象ではなく、人間が順応しなければならない対象というのである。したがって自然を征服するとか支配するという意識は東洋人にはありえなかった。東洋人たちは自然をありのままにして、そこに人間が合わせて調和を成す自然中心主義(Natural-centrism)が文明の主流を成して来た（8）。すなわち、西洋の人間中心主義に対して、東洋は自然と人間を同一のものと見た。物我一体や梵我一如は人間と自然が一つである時にだけ可能な境地である。東洋における自然というは「自ら」（自）「そのようであること」（然）である。人間が全く介入することができない、自らそのようであること、が自然である。したがって人間がむやみに自然をどうかすることはできない。むしろ自然は人間が従わなければならない標準である。老子は法自然と言った(老子25章)。これは自然を標準にして師匠にするという話で、考えと言葉と行動を自然に真似ることを意味する。そして老荘の立場では、事物を見るにせよ自分の目で見ずに事物自体の目、一切の**事物**の本体である道の観点から見なければならないと強調する。このような老荘の自然観は人間と自然の調和を追求することで天人合一として表現される（9）。

一方、古代文明の発祥地インドの仏教では「一切衆生悉有仏性」という言葉でもって、すべての生命体の同等性と生命の固有性、多様性を強調している。また仏教の中心概念である釈迦の慈悲心の本質も、人間よりはか弱い自然界の万物に対する憐憫と同情心として、西欧の人間中心の大自然とは相反する立場である。

一方、インドのヒンズー教(Hinduism)においても大地を女性とし、天は男性の概念としながら、自然と人間の一体性を強調する大自然と生と死の連続性と多様性を現わしている汎神論(Pantheism)の思想である（10）。

このように仏教における生命の平等性、ヒンズー教における人間と自然との同時性、中国老荘思想に現われた人間と自然との一体性そして生命の固有性は、確かに西欧文明の自然観とは異なる価値観と歴史を成して来た。

したがって人類歴史は自然と人間との関係において、東洋の自然観と西洋の自然観が各自異なる価値観と歴史を成しながら、平行線が引かれ二つに分けられている。

3. 深層生態学の台頭

1) 深層生態学の概念

深層生態学(Deep Ecology)は生態保全に対する代案を技術的、制度的、法的、あるいは行政的方法によらず、人間の倫理的意識の変化を通じて提示しようとする立場である。これはより深層的な人間内面の意識の変化を通じて生態系に対する態度を変えることで、生態系を破壊せずにこれを保全する行動原理を定立しようというところに意義がある（11）。

ディープエコロジーという概念は1972年ノルウェー哲学者ネス(A. Naess)によって提起さ

れたもので、我が国では「深層生態学」または「根本主義生態学」などと解釈されている。ネスはディープエコロジーと対立する概念としてシャローエコロジー(Shallow Ecology)、すなわち「表面的生態学」または「形式的生態学」を対比させながら次のように区別して説明している。

Naessは表面的生態学運動を、汚染と資源枯渇に反対する闘争として定められたと見做す。表面的生態学の中心となる目的は、先進国諸国民の健康と豊かさを保護するためのものである。これと反対に深層的生態学は相関関係をもつ全般的な領域の観点を取扱うが、より全体的で非人間中心的なアプローチを好む環境の中で人間の概念を拒否している。

おそらく依然としてNaessの基本的な要点に忠実でありつつ、より簡単な症状と基本的な原因の観点で成り立つかも知れない。表面的アプローチは汚染そして資源枯渇のような数々の問題に焦点を合わせることによって、ただ環境危機に対して直接的な結果だけを見る。くしゃみや咳が人々の日常的な日課を妨害しうるように、汚染と資源枯渇が現代工業社会の生活方式を妨害する。しかし薬がくしゃみや咳の症状を起こす原因を調査せず、ただくしゃみと咳を治療するという事は間違いかも知れない。だからやはり環境主義者たちが、彼らの社会そして人間についての原因は調査せず、ただ汚染と資源枯渇だけに神経を注ぐのは間違いであるかも知れない。

もちろんこのような方式で見れば、深層生態学では環境破壊の原因と見られる、いわゆる支配的な世界観に対する批判が起きている。深層的生態学者たちは、それで代案となりうる哲学的な世界観を作り上げるのを追い求める。根本的な環境主義に参加する人に、それはまず地球に対する政治的運動としての役目をする。例えば、深層的生態学は彼らの行動主義の形態を正当化する哲学を提供するのである(12)。

ここで、シャローエコロジーが主に先進諸国が各種公害に対する闘争や資源不足に対する覚醒、住民たちの健康問題と豊かな生活を中心課題にする環境運動であるなら、ディープエコロジーは、人間は自然の一部であり自然は私たちの生そのものであるという自然観と価値観をもつように教育して、西欧の機械論的自然観を脱皮して東洋の伝統的な自然主義価値観を強調するものとして説明している。

現代環境思想の中で一番重要な概念になっている「ディープエコロジー」の概念は、かつて巷間にあった軽薄な環境主義の問題点を浮上させてくれる。

ディープエコロジーを説明する人々の思考方式には、人によって相当な差異が見られる。その中で、生命システム論の立場で一番体系的な理論を展開している人がフリジョフ・カブラ(Frijoof Capra)である。

深層生態学の影響力は、まず環境倫理学内部で発刊されるジャーナルを見れば分かる(13)。有力なジャーナルであるEnvironmental Ethics(Hargroveが1979年に発刊)に載せられた大部分の論文が深層生態学に言及することによって、このような数々の論文をして深層生態学を紹介するのに大きく寄与し、学者たちの関心を引き起こした。深層生態学系列に属しない学者たちも、例えばフェミニズム系列の学者たちも、自分の立場を強化しようとする足場として深層生態学を選定、集中攻撃することも深層生態学の影響力を見せてくれる一つの例であると言えることができる(14)。

また深層生態学の影響力は、単に環境倫理学分野に局限されない。広範囲な分野の多くの

学者たちが深層生態学に支持を送っているし（15）、そして環境政治と環境運動にも深層生態学は直接的にまたは間接的に影響力を行使している（16）。このように深層生態学は、環境活動家と生態学、社会学、政治学、文学全般を包括した領域で生態志向的な思想家たちにとって灵感の根源となるだけでなく、環境哲学の論議で一種の標準点になったとすることができるほどである。

またディープエコロジー的意識というのは、窮極的には精神的で宗教的な意識である。人間の意識という概念が、個人が宇宙全体と連結されていると感じ、私たちが宇宙の一部分だと感じる意識自体であるということを理解すれば、エコロジー的意識というのは一番内面の精神的という意味である。

2) 深層生態論者たちの環境政策

深層生態学の環境政策を整理することは易しくない。ネスを頂点にして動いたりするが学者ごとに差異が生じるしかなく、同じ学者でも文の性格にしたがって、状況にしたがって強調点を異にするからである。ここではネスとデヴァール(B. Devall)、セッションズ(G. Sessions)などが提示した政策要綱を分析することによって環境政策の大綱を調べてみることにする。

ネスは1973年Inquiryという雑誌で次のように7項目のディープエコロジー原則を提示している（17）。

①環境の中にいる人間という観点は誤っている。望ましい観点は関係的(relational)-全体場(total-field)の観点である。仮にAとBは関係ABがなければこれ以上AとBではない。

②深層生態学は生命平等主義(biospherical egalitarianism)を採る。「生態系に存在するすべてのものは自己を実現する、すなわち生存して、繁盛して、自分それなりの形態に到達する平等な権利を持つ」。

③深層生態学は多様性と共生の原理を採る。

④階級と搾取に反対する。

⑤汚染と資源枯渇を防止する。

⑥複合性(complexity)は良いが複雑性(complication)は悪い（18）。

⑦地方自治と脱中心化を追求する（19）。

ネスが提示した7種の原則は、動物解放論に代表されるシンガー(P. Singer)と、リーガン(T. Regan)の生命中心主義(Bio-centrism)思想と生命の平等性と多様性、そしてバーグ(P. Berg)とセール(K. Sale)の生命地域主義(Bio-regionalism)的観点に連結されている。

また、哲学者George Sessionsとともに、ネスは1984年その間10余年の活動を次のように8項目に要約してこれをDeep-Ecologyの8箇綱領(platform)であると発表した。

①地球上の人類と生物たちは自体の固有の価値を備え、そのいくつかの価値は、人類の生存目的だけのために存在するのではない(生命の固有性と独自性)。

②生命体の多様性は固有価値実現に貢献していて、そのことだけでも価値をもつ(生命の多様性)。

③人間は、自体生存のための最小必要量以外には生物の多様性と生存権を剥奪する権利がない(生命の平等権)。

④人間自身と生物の繁栄のためには人口調節が必要である(生命の均衡性)。

⑤人間の自然破壊は極度に到達している(生命の危機性)。

⑥人間は政治的な意識改革によって、経済と技術発展に対するイデオロギー的基本構造を変えなければならない(意識改革の必要性)。

⑦人間の意識改革は量から質に変えなければならない。大きくまた多いということと偉大であるということの差異を認識しなければならない(生の質に対する自覚性)。

⑧このようなすべての条件に同意する人は、環境運動に直接間接的に同参する義務をもたなければならない(人間の義務と使命感) (20)。

この綱領は文の性格にしたがって、すなわち専門的な哲学誌に載ったことなのか、ではなければ大衆的な理解を目的として使われた一種のパフレットなのか、にしたがって文の形式と強調点が異なる。しかしいつも上位番号は数々の哲学的性格を帯びたものが、下位番号には具体的政策諸代案が提示されているという点を容易く知ることができる。

またディープエコロジストの中心人物として活躍しているカットン(W. R. Catton)とダンラップ(R. Dunlap)は、後期産業社会に生きて行く人類の新しい価値過程で区分し説明している (21)。

カットンとダンラップの3種の自然との変化と4種の仮定区分は、第一に、人間による自然支配的世界観である。これは中世以後の西洋キリスト教的文明史において人間中心主義(Anthropocentrism)的価値観を現わすことで、ホワイトをはじめとした一連の過程神学者たちが強烈に批判している、いわゆる神の信託管理人(Stewardship)という概念でも表現されている。

二番目の人間特例主義的パラダイムというのは、近世以後の啓蒙主義思想と西洋の科学的合理主義、特にデカルトとニュートンに代表される機械主義的自然観において、人間の理性を文化発展の原動力に価値化させた世界観であると言った。

第三に、ディープエコロジストたちは、これからの人間と自然との関係は新しいパラダイム、すなわち生態主義的歴史に変わるべきであると主張する。これらは人間の理性力の限界を警告しながら、結局人間と自然との綱目の中で人間史の原因と結果が起こると見ている (22)。

3) 深層生態学の発展と運動

深層生態学の次世代理論家といえることができる主要人物には原始的存在であるネス(A. Naess)と、根本生態論を継承し発展させたデヴァール(B. Devall)とセッションズ(G. Sessions)、そしてドレングスン(A. Drengson)、ハイデッガー研究者であるツィンママン(M. Zimmerman)、そしてフォックス(M. Fox)がいる。そのほかに深層生態論陣営の学者ではロードマン(J. Rodman)、ラチャペレ(D. LaChapelle)、エイケン(R. Aiken)、スナイダー(G. Snyder)、シード(J. Seed)、メイシー(J. Macy)、ホワード(J. Hayward)、エヴァンデン(N. Evernden)、リビングストン(J. Livingston)が含まれる (23)。

深層生態学の成功原因については多様な分析が可能である。まずネスが表面的(Shallow)生態論対深層(Deep)生態論という独特の名前で、人間中心主義対自然中心主義という論題を先導しているということができる。彼は単純ながらも簡明な二分法によって、私たちの文化が自然の価値をないがしろに考えているという点を浮上させるのに成功した。

生態主義的女性解放論(Eco-Feminism)者として知られたマーチャント(M. Merchant)は、このようなディープエコロジストたちの思想と活動を「より住みよい世の中を追求する急進主義的生態学(Radical Ecology)」と表現していたりもする。これはまたデヴァールとセッションズの環境天国論(Ecotopia)とも同じ立場である。

一方、無条件生産増大と利潤の増大、効率性にのみ焦点を合わせる破壊的な技術工学の性向に対立する意味で、自然に配慮し自然に対する干渉を最小化しながら大量生産を目的にする現代の技術工学の破壊性を克服しなければならないことを強調しながら、『小さなことが美しい』という宣言で有名なシュマッハー(E. F. Schumacher)や、「低エントロピー社会では人が森に暮すが、高エントロピー社会では鉱山が人を食べてしまうようになる」という表現で、人間と自然との関係を警告した環境史家ナシ(R. Nash)のいわゆるエントロピー理論も、私たちによく知られた環境経済学の中心理論である(24)。

リーン・ホワイトは、1967年『環境危機の歴史的起源』という論文で、「私たちが地球生態に関して何ができるのかは、人間と自然の関係に関する私たちの思考方式に依存している。私たちが新しい宗教を発見するか、ではなければ今までの人間中心的な哲学と宗教を根本的に再考するまでは、どんな科学や技術をもってしても現在の生態系危機から脱することができないだろう。」という文面によって人間の新しい自然観を促している(25)。

したがって筆者は、統一教の教理書である統一原理と統一思想が、今日生態系危機を克服するのに、より徹底的な代案として提示しようとするのである。

またシモーヌ・ボーヴォワール(S. de Beauvoir)夫人の『第2の性』とフリーダン(B. Friedan)の『女性の神話』から大きく影響を受けたマーチャント(C. Merchant)とキング(Y. King)は、社会的な女性運動を生態主義と結託させて、いわゆるエコフェミニズム(Eco-Feminism)(26)として発展させている。一方、「女性は彼らの生理学的な数々の特徴—新しい生命を懐妊して誕生させること—のために、自然を搾取して破壊する男性たちとは異なり自然と大地の正にそれである。」と「女性の男性に対する関係は、自然の文化に対する関係のようなものか?」という論文で規定したオルトナー(S. Ortner)の見解は、エコフェミニズムを端的に説明するものであるという。環境神学との関係では、フォックス(M. Fox)に代表される「霊性的生態論(Spiritual Ecology)」(27)と一連の「過程神学(Process Theology)」(28)者たちから現われる。フォックスは環境問題を古代社会の神秘主義回復から求め、南米の解放神学的立場から説明しているのであり、コブ(J. B. Cobb)そしてグリフィン(S. Griffin)は、環境問題は反キリスト教的立場に立って、ポストモダンの価値観から解決方法を講じなければならないという見解である。

最後に環境文学(29)は、かつて1850年代にアメリカの作家ソロ(H. D. Thoreau)から出発したもので、彼は資本主義社会の過剰生産と消費パターンを批判して、質素な生活様式を賞賛する主題の作品活動をしたのである。いわゆる「Nature Writing」として表現される環境

文学は、主にエッセイやノンフィクションの形式で現われたが、詩や小説もあってアメリカ原住民たちの口伝文学に関心が高かった (30)。

4. 統一思想と深層生態学

1) 自然と人間と万物との関係

統一思想はキリスト教の聖書に立脚して、神が宇宙と人間を彼自身に似せて創造したという仮定から出発する (31)。したがって人間と自然は切れない密接なきずなをもっている。また存在界の原因は神なので、存在の根源は神である。したがって存在界は神の創造から始まる。ところで神の創造は単に製作者の立場に留まらないということが統一思想の見解である。すなわち被造世界は神の心情を動機とした創造による結果である。神の創造は偶発的だとか自然発生的なものではなく、ある必然的な動機によって行われたという話である (32)。

また、神様が創造した被造物のうち、人間と万物はどんな存在で、どんな関係にあるのか？統一教の原理講論によれば「被造世界は無形の主体としていらっしゃる神様の二性性相が創造原理によって象徴的または形象的な実体に分立された個性真理体 (33) として構成されている実体対象である (34)。万物と人間は皆神様の被造物であるが、万物は象徴的な実体対象であり、人間は形象的な実体対象である。そして人間は万物世界を総合した「小宇宙」と称えられる。そして神様が創造の理想から見た人間の本来の姿は、神様と類似の感情を共有し神様の創造性を受け継いだ存在であり、良い家庭をつくることができ、万物の主管主としての資格を備えた存在である (35)。神様が人間に下賜した創造性と主管性は心情に土台を置いているという事実が重要である。このような性格をもつ人間は決して環境を破壊することができないのである。

また、神様は人間を創られる前に、これから創造なさる人間の性相と形状を形象的に展開して万物世界を創造した。だから人間は万物世界を総合した実体相となる。すなわち、人間にはどんな動物の構造と要素と素性もすべて具備されていて、植物の構造と要素とその素性が皆具備されている。また人間はすべての鉱物質の要素ももっているし、人間と地球も人体構造の表示体と類似のその素性が皆具備されている。

イギリスの大気化学者ラブロック (J. Lovelock) は1987年彼の著書で、一般的に無機体として認識されている地球も一つの生命体のような地球有機体説を、ギリシャ神話に登場する「大地の女神」であるガイア (Gaia) という名称を援用して一つの仮説を提示している (36)。このようなラブロックのガイア理論は検証を充分に通さなければならない一つの仮説で、一種の目的論的地球観で宗教的性格を浮き立たせるだけでなく、汎神論の立場に立っていると批判する学者も多いが、今日大部分のディープエコロジストたちは彼の理論を支持している実情である。ラブロックのこのような地球有機体説は統一思想の存在論において個性真理体の本質として性相と形状を説明する観点と同一な立場であると見る。何故ならばラブロックの地球有機体説が地球と人体の共通要因関係に帰納的にアプローチしているとすると、統一思想の存在論では人体と自然観の関係を演繹的に説明しているという差異であるだけで、その基本観点は同一な帰結点にアプローチしているのを見るようになる。言い換えれば、従来の物理化学的概念では鉱物を一つの無機物に過ぎないとする短所を、統一思想で

は有機物化させることで、ラブロックが地球の無機物に生命を付与する理論と同一の原理を採用しているというのである。

一方、文鮮明先生は人間と万物に対する御言葉において次のように主張している。

「人間は小宇宙と呼びます。人間は宇宙の縮小体です。皆さんの体は地球がもっているすべての要素をすべて含んでいます。宇宙が加担しています。宇宙は自分が人間を創ったと言うこともできます。宇宙にある万物たちが人間の肉体の中にそれぞれ自分たちのものを皆捜すと主張するようになれば、人間は皆奪われてしまうでしょう。結局は宇宙からすべての要素を借りて来て、私自身が形成されたということを知らなければなりません。この言葉は「宇宙が私を生んでくれた」、「宇宙が私を創った」という意味にもなります。それで宇宙が私を生んでくれた最初の親ということを知らなければなりません。皆さんという存在は宇宙の総合実体であるのです。だから皆さんは「私は動く宇宙である」「私は活動する宇宙である」と言うことができます。このような観点から皆さんは宇宙を愛さなければならないのです」(37)。

人間は正に宇宙の縮小体であり、小宇宙であり、万物がもっている要素は人間がすべてもっているし、宇宙が私を生んでくれて私を創ったという要旨の話である。結局神様に似せて人間が創造されたし、万物は人間に似せて創造された。

すなわち、神様の様相を広げて実体化させたことが人間であり万物であるなら、人間と万物はそれぞれの個性真理体として実に貴重な存在である。したがって人間と自然の関係を正しく規定するようになれば、深層的な環境運動が自発的に起きるであろう。

2) 人間を中心した万物(被造世界)が存在する目的

統一原理によれば、人間を中心した被造世界の存在する目的は神様に喜びを返すところにある。そしてすべての存在は二重目的をもった連体なのである。上で説明したように、すべての存在の中心には性相的なものと形状的なものの二つがあるから、その中心が志向する目的も性相的なものと形状的なものの二つがあって、それらの関係は性相と形状の関係のようである。そして性相的な目的は全体のためであり、形状的な目的はそれ自体のためであるので、前者と後者は原因的なことと結果的なこと、内的なことと外的なこと、主体的なことと対象的なこととの関係をもっているのである。だから全体的な目的を離れて個体的な目的がありえず、個体的な目的を保障しない全体的な目的もありえない。よって森羅万象の被造物はこのような二重目的によって縛られている一つの宏大な有機体なのである(38)。

素粒子から宇宙に至る個体の系列を調べて見ると、素粒子は素粒子としての存在を維持しながら原子(全体)を形成するために存在する。原子は原子としての存在を維持しながら分子(全体)を形成するために存在して、分子は分子としての存在を維持しながら細胞(全体)を形成するために存在し、細胞は細胞としての存在を維持しながら生物の組織や器官(全体)を形成するために存在する。

原子や分子は鉱物(全体)を形成して、また地球(全体)を形成するためにも存在する。地球は地球としての自体を維持しながら太陽系(全体)のために存在する。銀河系は銀河系自体を維持しながら宇宙(全体)のために存在している。また宇宙は宇宙として存在しながら人間(全体)のために存在しているのである。人間は外形としては極めて小さな存在だが、その価値と

しては全宇宙を総合したよりもっと大きい。宇宙が人間のために存在するのはそのためである。このように被造物は皆全体目的と個体目的を一緒にもっている。この被造物の全体目的の中で最高の全体目的は皆人間のために存在するところにある。このように素粒子から宇宙、人間に至るまですべての被造物は二重目的をもった連体として存在している (39)。

したがって被造世界のすべての万物の存在目的は、為に生きるところに目的があり、究極には神様に喜びを返すところにあると見る。深層生態論者たちの共通した価値観は、私たちが住んでいる地球と宇宙のすべての存在物に対する保護と保存そして存在価値の平等主義であると見る時、統一思想における核心思想のひとつである「真の愛」の立場から見た自然と人間との関係をそのまま反映していると見る。真の愛の生について文鮮明先生は次のように説明している。

「真の愛の生はどんな生ですか？真の愛は公益性を帯びた無形の秩序であり、平和であり、幸福の根源です。真の愛の本質は為にされたいという愛ではなく、他人の為、全体の為に先に施して為にしてあげる愛です。

与えても与えたという事実自体を記憶せず絶えず施す愛です。喜びで与える愛です。お母さんが子を胸に抱いて乳を飲ませる喜びと愛の心情です。子が親の前に孝行して喜びを感じるそんな犠牲的の愛です。神様の人類創造がそうであったように、何も返してもらおうという期待や条件なく施す、絶対、唯一、不変、永遠的の愛の創造です。

真の愛は宇宙の源泉であり、宇宙の中心、宇宙の主人をつくってくれる愛です。真の愛は神様の根であり、意志と力の象徴でもあります。したがって真の愛で結ばれば永遠に一緒にいても良いばかりで、宇宙はもちろん神様までも引けばついて来る愛です。墮落の後裔となった人間がつくっておいた国境の壁、人種の壁、さらには宗教の壁までも永遠に終息させることができる力が真の愛の価値です。

神様の真の愛の主流属性は、絶対、唯一、不変、永遠なもので、誰でもこの神様の真の愛を实践躬行する時、神様と同居、同楽するようになって同参圈まで享受するようになります。(40)

真の愛は人間と人間、人間と自然との関係において互いに奪うのではなく、互いに与えまた与えたい心もちと心情であり、搾取でない犠牲と奉仕の精神である。

したがって人間を中心とした万物(被造世界)が存在する目的を明らかに認識すれば、東西洋の自然観を包括する自然観として、すべての人々が自ら自然保存のために努力するであろう。

3) 個性真理体としての人間と連体としての万物

万物世界は本然の人間の姿を標本にして創られたので、自然界を通じて本来の人間と社会の姿が分かるというのが統一思想の見解である。また被造世界は神の心情を動機とした創造による結果である。神の創造は偶発的あるいは自然発生的なものではなく、ある必然的動機によって行われたという話である。

そしてすべての存在物(万物としての通称)たちは神様の属性に似て、実体に分立された神

様の実体対象として神様の属性に個性的に似た個性真理体というのである。

個性真理体はすべての被造物が無形の主体であられる神様の二性性相に似て実際に分立された神様の実体対象というのである。このような実体対象を個性真理体という。人間は神様の形象的な実体対象であるから形象的個性真理体といい、人間以外の被造物たちは象徴的実体対象であるからそれらは象徴的個性真理体であるという（41）。

それで個性真理体は形象的個性真理体(人間)と象徴的個性真理体(人間以外の被造物)に大別される。そして被造世界は無数の個性真理体で構成されているが、その低級なものから高級なものに至るまで段階的に秩序整然として連結していて、その中で人間は最高級の個性真理体として存在しているのである。そして個性真理体は皆球形運動をしているが、低級な個性真理体はより高級な個性真理体の対象になるので、この対象の球形運動の中心はより高級位においてその主体になっている個性真理体である。このように幾多の象徴的個性真理体の中心は、低級なものからより高級なものに向かって連結されて上がっていき、その最終的な中心は形象的個性真理体である人間になるのである（42）。

ここにおいて形象は象徴より一層具体的であり、一層近いことを意味する。神の立場において人間とその他の被造物は確かに差異をもつ。神様は人間を通じて神様の愛を万物に伝達すると説明する。この個性真理体は他の個性真理体と授受作用を通じて連体を形成する。どんな個性真理体も独自に存在することができないので、他の個体と関連をもって円満な授受作用をするようになっている。また、必然的にもつようになる**存在者**の目的も個体目的と全体目的の調和を通じてそれを達成することができる（43）。

このように統一思想の個性真理体及び連体という概念は、東洋の自然観において仏教の生命の平等性、ヒンズー教における人間と自然との同時性、中国老荘思想に現われた人間と自然の一体性そして生命の固有性と一脈相通じた概念になっている。だから統一思想の個性真理体及び連体の概念の中には深層的環境運動の要素をもっていると見ることができる。

4) 神様の心情理解

統一教会において神様は心情の存在であると断言する。対象に愛を施す時喜びを感じる情的衝動として定義される心情は、神様の神性の核心であるだけでなく、創造理想の背後にある窮極的特性である。心情の目的は神様が人間に下さった三大祝福を実現するところにある。心情の結果は喜びであり、それは対象が主体の理想を十分に反映し始める時現われる。統一原理によれば神様は自身の属性の核心として心情をもったから、自身の対象として人間を、そして人間の対象として宇宙を創造せざるを得なかったというのである。（44）

したがって西洋の自然観が「自然を征服の対象」と見るのに比べ、東洋では「調和と順応の対象」として見ていて、統一教会では環境倫理の土台として「心情動機創造説」（45）を掲げている。今私たちが経験している環境問題は基本的に人間と自然の関係を正しく規定することができなかった結果であり、統一教会で主張する心情動機創造説はこれに対する代案になりうるのである。（46）

一方、神様と人間の心情の機能は数えきれないほど多いが、その中で核心となる10種の心情の機能は次のようである。（47）第一に、心情の機能は創造目的を追求して樹立する機能である。神様の心情の衝動が充足されるために神様は愛する対象と経験が必要である。対象

を創造するためには創造目的の樹立が先行されなければならない。神様の神性を所有した人間はこのような神様の心情の機能を所有している。第二に、心情の機能は創造目的を実現するのである。神様の心情が必然的に愛する対象とともに愛の経験をするために、絶えず神様は実体対象を創造なさる。したがって神様の宇宙万物の創造は偶然に成り立ったのではなく、愛の対象を迎えようとする必然的な動機によって成り立ったのである。第三に、心情機能は真の愛の具現である。神様の真の愛は、まず創造の過程で表現された。文鮮明先生は神様が人間と宇宙を創造なさる時、神様の真の愛を全力投入なさったとおっしゃる。第四に、心情機能は生心と肉心が調和して均衡的な作用をするように衝動する。心情は人間が真なる人格を成熟させるように生心の主体的作用と肉心の対象的作用を均衡を取って維持するように刺激する。五番目に、心情機能は知、情、意の機能を調和裡かつ均衡的に発展させる衝動である。神様に似せて創造された人間の知、情、意の機能が何であるかを知って、感じて、行うように神様から生まれながらに付与されたのである。だから人間は何でも知りたいし、探求したいし、学びたいし、感じたい欲求をもっていて、その欲求を行動として実現したいのである。六番目に、心情機能は絶対価値の真、美、善の出発点として機能をする。また心情は知、情、意の機能が真、美、善の価値を追求するように促進させる。真、美、善の価値の根は神様であり、神様は絶対、唯一、不変、永遠なので真、美、善の価値も絶対、唯一、不変、永遠である。七番目に、心情機能は心情文化を樹立するための多様な文化の原動力である。心情は知、情、意の活動の原動力であり、心情を中心した知、情、意の活動の成果、すなわち総和が文化である。八番目に、心情機能は万有原力を発生させる根本的衝動である。統一思想は原力と万有原力を区別する。原力は神様の心情の衝動的機能によって神様の中で授受作用を通じて発生する力である。原力は神様から絶えず放出され人間を始めとするすべての被造物に与えられる。九番目に、心情機能は神様と人間の関係、人間と人間の関係、そして人間と自然の関係を自然法則と価値法則にしたがって有機的に維持するように衝動する機能である。十番目に、心情機能は神様と人間の関係だけではなく、万物相互間関係も調和と統一を成すように促進させる機能である。

以上、10種の心情の核心的機能は互いに親密で補完的で、依存的関係として調和裡に統一された機能を果たしながら作用する。しかし人間堕落によってこのような心情が完全に機能することができなくなった。このような心情の機能を開発し発展させるために、人間は自ら持続的で奮闘的な努力と心血を傾けない限りそれは期待することが難しいであろう。

統一教会が主催していたヨハネスバーク「霊性と環境」についての会議（48）で発表していた基調演説文で、「霊性が持続的な成長とどんな関係があるか？」において次のように指摘している。「第一に、持続的な発展の理想は政治、経済、科学そして倫理的な面からのみ見るのではなく、宗教とその宗教が教えようとする根本起源である神が包含した広範な世界観から見なければならないのである。二番目に、環境は窮極的に人間の認識、人間の文化、そして人間の行動と関連があるのです。三番目に、私たちが持続的な成長のような重要な問題を扱おうとするならば、統治と管理についての新しい手本あるいはモデルを作らなければなりません。」述べた。

このように統一教会では霊性の衰落による持続的な発展と世界倫理の欠如を問題点として指摘した。

したがって私たちは前に指摘したように、意識の一大革命が必要なのである。今日環境危

機の根本原因を、人口増加、産業化、公害などにあるのではなく、人間と自然存在の正しい本質を悟ることができなくなった人間自身にあると見て、本性の人間の姿を捜して真正なる神様の心情を理解することが自然理解の核心になるのである。

何故ならば、今日生態系危機を招いた根本原因は、環境を創造した神様の意図に逆らった人間の利己主義的欲望にあることを私たちは述べざるを得ない。可能な限り多く所有して、所有を通じて自己を拡張しようとする人間の無限な欲望が、生態系の危機を招来した一番根源的な原因である。人間の本性の中に深く根づいているこの欲望は、所有と消費と享楽と力の所有を最高の価値として生きる現代人の価値観として現われる。(49)そしてどんな制度と理念を採択しても、神様の心情がない人間の無限な利己的欲望が放置される時、生態系の危機は避けることが難しい。だから神様の心情の理解が先行されなければならないのである。したがって統一思想は宇宙の根本と人間と被造物の真正なる本質を悟るようにする、神様の心情理解がその核心になっている。

5) 万物の日の制定

統一教会を創立なさった文鮮明先生は、1963年旧暦5月1日を万物の日に制定なさった。その後1994年3月から「真」の字を付けて、真の万物の日として記念している。

万物の日の意義は、神様は人間を創造なさる前、人間が主管しながら暮ることができる環境を用意なさろうと万物を創造された。しかし人間が墮落することによって被造物は本然の主管主を失ってしまい、真なる神様の息子たちが現われ、主管してくれるのを待ちこがれて今まで嘆息しながら苦痛を受けて来た。

文鮮明先生は1960年旧暦3月1日父母の日を立てられ、同じ年の旧暦10月1日子女の日を立てられることによって、真の父母と真の子女が一つになりうる道が開かれるようになったのである。その後、1963年万物の日を制定なさって毎年旧暦5月1日、真の万物の日を統一教会の名節の一つとして記念している。(50)

万物の日制定の当時、文鮮明先生はその日の意義を次のように説明している。

「神様は宇宙を創造なさる前に、すでに理想を抱いていらっしゃいました。それは神様の心情を基盤にしたのです。その創世前の理想を実現するために、神様におかれては創造の偉業を広げようと、神聖な天と神聖な地、すなわち新しい天と新しい地に創造の目的を立てようとなさったのです。その基盤の上に創造の目的を成した心情の世界をお立てになって、その基盤の上に変わりえない神様の御旨をお立てになって、その御旨を中心として祝福しようとなさったのです。

この祝福は単に人間だけのためではありません。また天地だけのためでもないのです。神様におかれては、あなたの内的な心情の基盤から全部を投入して祝福なさったのです。この祝福がそのまま成り立っていたのなら、この世界、この天地には勝利の光栄が充満したはずです。そういう世界の中で、神様の心情的なすべての内容を完備した表示体である人間をして、神様の喜ぶことができる家庭的な基盤をつくっておいて、そこで天的な聖業を人間的聖業として受け入れて、永遠無窮な**幸せの福地**を建設するようになさったはずです。これが神

様の理想であり願いなのです。

ところが思いもよらない人間先祖の過ちによって墮落といううらみ深い出来事が起こり、人類世界には墮落による苦痛が生まれ、すべての人類は福地の故郷を失ってしまい、苦痛の世界で住むようになったのです。ですからこの世界を眺める神様が悲しむのは勿論、神様から創造された天地万物も悲しむのです。

人間がこの悲しみから脱するためには、蕩滅条件を立てなければならないのです。

神様は愛でいらっしゃるゆえに、このような人間たちを死亡世界にそのまま置くことができず、その深く広い愛でもって本然の御旨を再びお立てになろうと復帰して来られました。このように失った子を訪ねて来られるのに、6千年という長くも長い血と涙の歴史が流れたのです。」(51)

統一教会は毎年旧暦5月1日を真の万物の日として記念している。この日は人間と自然との関係をもう一度感謝する日として、新しい天と新しい地に創造の目的を立てようとする心情文化の本質とも連結されるのである。また統一教会の教会暦(Church Year)は、文鮮明先生によって墮落の反対経路を通して蕩滅復帰摂理によって時代ごとに条件を立てて、一步一步本然の世界に向かって復帰して来る記念日であり祝祭日である。だから統一教会の教会暦一つには言葉にできない数々の内容が内包されている。

5. 結論

統一思想は文鮮明先生の思想として統一運動及び女性解放運動の理念であり、**神主義**または頭翼思想と呼ぶ。**神主義**というのは、神様の真理と愛を核心にする思想という意味であり、頭翼思想というのは右翼もなく、左翼でもなくより高い次元で両者を包容する思想という意味である。(52)

一歩進んで、統一思想は人類の諸問題を根本的に解決することによって、永遠な神様の真の愛による理想世界を創建しようとする神様の思想である。したがってどんな諸問題であるといっても、統一思想(**神主義**)を適用すれば容易くまた根本的に解かれるようになるという観点にしたがって、統一思想において根本的な環境運動として深層生態学的内容に関して研究するようになった。

まず、生態系問題に対する論議は東西洋の自然観が大きく二つに分けられ、互いに異なる価値観と歴史を成して来た。

しかし最近の自然に対する現代的主流は「人間中心主義から自然中心主義への転換」ということができるだろう。しかし統一思想の立場は外形的にはそういう潮流に合流しない。それは神様の創造の原則と過程が、人間を自然と差別化したという認識の上に立っている。人間は神様の形象的創造物であり、自然は象徴的創造物だからである。しかし人間には自然を真の愛で保護して主管しなければならない責任がある。責任という側面から人間はその中心に立っている。そして統一原理は徹底的な**神主義**に立っていると言うことができる。

次に、環境問題解決のためのアプローチの方法として何種類かの方法がある。一番目に、環境問題を主に科学技術的な側面から研究する環境工学的アプローチの方法があり、二番目に、環境問題を関連法規や制度の新設による制度的アプローチ方法、三番目に、環境問題を

解決する方法を社会運動と結びつける社会運動的アプローチ方法、四番目に、環境問題を主に教育を通じた学校教育的アプローチ方法、五番目に、環境問題の発生根源が人間の意識構造(価値観)にあると前提した観点として環境主義的イデオロギーアプローチ方法がある。深層生態学の台頭は環境主義的イデオロギーアプローチ方法の一つで、統一思想とその接点を訪ねようと努力した。

まず、統一思想と統一原理は創造の本質と目的そして神様の属性についての正しい理解を強調している。そして神様自身の形象どおりに万物を創造したという根本的過程は、人間と自然の関係類型に重要な手がかりを提供していて、神様の創造の動機は心情にあると言及している。

このような前提から統一原理と統一思想は根本的に神様主義を標榜していることが分かる。すべての存在の中心に神様があつて、その神様の御旨がどうなのかを知ることが問題解決の鍵であることを暗示する。また自然は神聖なものであるにもかかわらず、それが人間と必然的関連をもつものと見ている。いわば自然は人間を離れては意味がない。すなわち、自然は人間のために存在する。人間は自然を主管するようになっている。人間は神様から創造性を付与された。ただ付け加えられた数々の命題は本来の人間の場合に該当する。しかし人間は墮落によって本性を喪失して奈落に落ちることによって本来的位置を喪失したのであり、本来の機能も喪失した状態であるというのである。したがって人類歴史の目標は人間の本性の回復である。

一方、人間が万物の総合実体相としての「小宇宙」であるのは、人間は万物の要素を含んだという意味であり、同時に人間が宇宙の中心にいることを意味する。

リン・ホワイトは(Lynn White)は「私たちが地球生態に関して何ができるのかは、人間と自然の関係に関する私たちの思考方式にかかっている。私たちが新しい宗教を発見するか、でなければ今までの人間中心的な哲学と宗教を根本的に再考するまでは、どんな科学や技術をもってしても現在の生態系危機から脱することができないであろう」と言った。

筆者は敢えてリン・ホワイトが言う一つの新しい宗教の教理として、統一原理と統一思想を極めて一部分だが関連させて見た。そして環境運動の方法として一番基本的な方法として、深層生態学の基底として統一原理と統一思想を紹介したのである。

特に、今日人間中心的な宗教やイデオロギーをもっては解決することができない環境危機の克服は、正に人間の本性を取り戻して、神様の心情理解を前提にする統一原理と統一思想が一つの福音になるものと確信する。

参考文献

1. 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』ソウル:成和社、1996。
2. 統一思想研究院、『統一思想』ソウル:成和社、1993。
3. 文鮮明先生御言葉編纂委員会、『文鮮明先生御言葉選集』ソウル:成和社、1988。
4. 全国大学原理研究会、『統一原理教材』ソウル:成和社、1994。
5. 金ドンギョ、『世界の環境教育』ソウル:教育科学社、1966。
6. 崔ビョンファン、『哲学の諸問題と統一思想』忠南:鮮文大出版部、2005。
7. 韓国仏教環境教育院編、『東洋思想と環境問題』ソウル:図書出版模索、1996。

8. 金ギョンジン、『生態系の危機と神学』ソウル:大韓キリスト教書会、1997。
9. 李ジョンベ、『生態学と神学』ソウル:鐘路書籍、1989。
10. 具ドワン、『韓国環境運動の社会学』ソウル:文学と知性社、1996。
11. 韓国キリスト教研究所編、『生態系の危機とキリスト教の対応』ソウル:大韓キリスト教研究所、2000。
12. ノーマン C. ハメル、鄭チノン翻訳、『地の神学』ソウル:韓国神学研究所、2001。
13. Fred Van Dyke、劉ジョンチョル翻訳、『環境問題と聖経的原理』ソウル:韓国基督学生会出版部、1999。
14. Capra Fritjof、李サンボン、具ユンソ訳『新しい科学と文明の神学』ソウル:汎洋社、1985。
15. _____、『現代文理科学と東洋思想』、ソウル:汎洋社、1989。
16. A. Naess、The Shallow and The Deep Long-Range Ecology Movement: A Summary、*Inquiry* 16、1973。
17. Kentucky、James E. Will. *The Universal God*. Louisville: Westminster John Knox Press、1994。
18. King、Hans. *Global Responsibility*. New York: Continuum、1993。
19. _____、*Yes to a Global Ethic*. New York: Continuum、1996。
20. Thomas Berry. *The Dream of the Earth*. San Francisco: Sierra Club Book、1990。
21. White、Lyne. "The Historical Roots of our Ecological Crisis"、*Science* 155. 1967。
22. Fox Matthew、*Original Blessing*、Santa Fe: Bear and Company、1983。
23. Sallie、McFague、*Model of God-Theory For Ecological、Nuclear Age*. Minneapolis Fortress press、1987。
24. _____、*The body of God*. Minneapolis Fortresspress、1973。
25. Clinebell、Howard、J. *Ecotherapy*、Minneapolis:Fortress、1966。
26. Devall、Bill an Session George、*Deep Ecology*、Gibbs Smith、1985。
27. J. Passmore. *Man's responsibility for Nature: Ecological Problem and Western Tradition*. London: Duckworth、1980
28. Fritjof Capra. Ernest Callenbach. *Deep Ecology*. 日本語訳、東京:佼成出版社、1995
29. _____、*The Turning Point*. 日本語訳、東京:工作舎、1995

Key Word

生態学、神様主義、個性真理体、連体、万物の二重目的、深層生態学、表面的生態学、自然中心主義、人間中心主義、神様の心情理解

(1) NIMBY(Not In My Backyard)からNIABY(Not In Anybody's Backyard)にまたNOPE(Not On Planet Earth)

(2) ハワードクラインベル、呉ソンジュン、金ウイシク訳、『生態療法』(ソウル:韓国長老教出版社1999)、p. 38

- (3) 金ドンギョ、「自然生態系の原理と平和思想の構築」『世界平和統一学会 夏季学術発表論文』2005、pp. 5-6。
- (4) 金ギュジン、『生態系危機と神学』（ソウル:大韓キリスト教書会、1997）。p. 100。
- (5) Ibid、pp. 100-101。
- (6) Ibid、p. 102。
- (7) Ibid、p. 103。
- (8) 崔ビョンファン、『現代社会と倫理』（忠南:鮮文大出版部、2004）。p. 63。
- (9) 崔ビョンファン、『哲学の諸問題と統一思想』（忠南:鮮文大出版部、2005）。p. 132。
- (10) 金ドンギョ、op. cit. p. 7。
- (11) 崔ビョンファン、『現代社会と倫理』、pp. 71-72。
- (12) A. Naess、"The Shallow and the Deep、Long-Range Ecology Movement: a summary" Inquiry 16 (1973)、pp. 95-100。
- (13) 根本生態論者たちが発刊する雑誌としてはSessionsが発刊するEcophilosophy(1976発刊)というニュースレターと、そしてDrengsonが発刊するThe Trumpeter(1983発刊)がある。
- (14) A. K. Salleh "Deeper than Deep Ecology"、Environmental Ethics6(1984)、pp. 339-345。
J. Chenesy、"Ecofeminism and Deep Ecology"、Environmental Ethics9(1987)、pp. 115-145。
- (15) 深層生態学に支持を送る学者としては「人口爆発」という著書でよく知られたP. Ehrlich、文明批判家Roszakと物理学者Capraが含まれる。
- (16) カプラは緑色政治と深層生態論の関係を強調する。それによれば、深層生態論は緑色政治の哲学的基盤を提供している。しかし環境問題に関する解決の動きが主に政党の次元で成り立つヨーロッパ(特にドイツ)から、より民間環境運動団体がその主軸を成しているカナダ、アメリカ、オーストラリアで深層生態論の役目が大きいと判断される。例えばForemanが議長であるEarth First!は深層生態論を公式理念として採択したことがあり、著名な環境団体であるSierra ClubとFriends of Earthも深層生態論と親和性が高い。
- (17) A Naess、"The Shallow and the Deep、Long-Range Ecology Movement: a summary" Inquiry 16 (1973)、pp. 95-100。
- (18) 「複雑性」は無秩序で混雑ばかりする大都市のイメージに現われるように、統一性が欠けた状態を意味する。反面「複合性」は高等動物の神経組織に見られるように、非常に複雑なようでありつつ高度の有機的統一性と秩序をもつ状態を意味する。
- (19) 多くの生態主義者たちは、地方自治が各個人の自由を伸張させてくれる政治形態でもあるが、エネルギーを節約して環境汚染を減らすことができる社会形態であるという面から、地方自治と脱中心化を好む。
- (20) Devall and Session、George、Deep Ecology、Gibbs Smith、1985、pp. 69-70。
- (21) 「A New Ecological paradigm for Post-Exuberant Society」American Behavioral Scientist、24、No. 1、1980/W. R. Catten、R. Dunlap。
- (22) Fritjof Capra、Call embach、Deep Ecology日誌、(東京:佼成出版社、1995)、p. 24。
- (23) Fox、Toward A Transpersonal Ecology、(Boston: Shambhala Pubilcation、1990)、P. 70そして学者たちとこれらの数々の著書に対してはPP. 269~287参照
- (24) コンドミラズ、ネスイ、『科学思想、NO3』（ソウル:汎洋社、1992）、P. 106。
- (25) White. Lynn、"The Historical Roots of our Ecological crisis、"Science 155 (1967)pp.

1203~1207。

(26) 1974年フランスの作家ドボンヌ(F. d' Eaubonne)によって提起されたEco-Feminismの概念は、従来のパスポート運動に環境問題を結びつけたのである。その後マーチャント(C. Merchant)とキング(Y. King)によって発展した。

(27) M. Fox, "A call for a spiritual renaissance" (「Green letters」、5、No. 11989)で、西洋の古代神秘主義を回復し、それを社会正義と環境問題に結びつけなければならないと言った。彼は創造の宗教を南米の解放神学の見地で解釈しようとした。それは、肉体と精神の統一、科学と芸術、宇宙論は結合し、性差別と人種差別を無くし大地を人間中心主義から解放しなければならないと見た。

(28) Ecological Process Theologistたちは、靈感、感応、神霊(inspiration)と宗教的指針を得るためには、アメリカの原住民や東洋哲学者の知恵に帰るのではなく、反主流の西洋哲学者たちの倫理観から発見することができるを見た。

John B. CobbとGriffinは反キリスト教的思想からPost-modern的な生態学を研究発展させた。

(29) 自然を舞台にした文学作品群として北米では歴史が深い文学ジャンルである。主にエッセイ、ノンフィクションだが詩と小説もある。アメリカ原住民たちの口伝文学などである。

(30) 金ドンギュ、『ディープエコロジーと韓国の環境政策』、世界平和教授協議会第9回環境セミナー発表論文、1999. p. 38。

(31) 統一思想研究院、『統一思想要綱』(ソウル: 成和出版社、1993)、p. 31。

(32) Ibid、p. 74。

(33) Ibid、pp. 170-175を参考にすること。

(34) 全国大学原理研究会、『統一原理教材』(ソウル: 成和出版社、1988)、p. 20。

(35) 崔ビョンファン、『哲学の諸問題と統一思想』、p. 134。

(36) 金ドンギュ、「ディープエコロジーと統一思想の接点と展望」、『季刊統一思想』第36号、1996. pp. 112-114

(37) 文鮮明先生御言葉選集編纂委員会、『文鮮明先生御言葉選集』第9巻(ソウル: 成和社、1992)、p. 168

(38) 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』(ソウル: 成和出版社、1966)、p. 45。

(39) 『統一思想要綱』 pp. 186-187。

(40) 「神様の理想家庭と平和世界のモデル」という主題で統一思想の創始者であられる文鮮明先生が2005年9月12日アメリカ・リンカーンセンターで宇宙平和連合創設大会基調演説をなさった。

(41) 『原理講論』 pp. 27-29。と『統一思想要綱』 pp. 167-175参照。

(42) 『原理講論』 pp. 38-39。

(43) 崔ビョンファン、「統一思想と環境問題」、『統一思想と現代社会』(大田: ビンドル出版社、2003)。p. 76。

(44) サイモン・ペテロ、「環境破壊は阻むことができるか」、『統一思想研究論叢第11集』(忠南: 鮮文大出版部、2003)、p. 247。

(45) 神様の創造は偶発的なものではなく、自然発生的なことでは更でない。それは抑制不能の必然的動機によって行われた、明白な合目的な意図によって成されたのである。(統一思想要綱p. 74参照)

- (46) 崔ビョンファン、op. cit. p. 76から再引用。
- (47) 文サンヒ、「心情と規範中心の大学教育」、『韓鶴子総裁還暦記念文集第2巻』（忠南：鮮文大学出版部、2003）、pp. 356~362参照
- (48) 世界平和統一家庭連合、アメリカ・イスラム連合、世界NGO連合主催で2002年8月29日南アフリカ共和国・ヨハネスバーグ「霊性と環境」についての会議で郭錠煥会長が基調演説文を発表した。
- (49) 金ギョンジン、『生態系危機の神学』（ソウル：大韓キリスト教書会、1997）。p. 49。
- (50) 世界平和統一家庭連合、『世界宣教ハンドブック』未刊行資料、2000、p. 39。
- (51) 文鮮明先生御言葉選集編纂委員会、『文鮮明先生御言葉選集』第12巻（ソウル：成和社、1992）pp. 279-280。
- (52) 『統一思想要綱』p. 20。